

福音書通読

7月



(7月 30日)「ルカによる福音書 8:16~25」

だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。

(ルカによる福音書 8章 18節)

- ・信仰義認という言葉があります。わたしたちは信仰によってのみ、神さまから義と認められるという意味です。しかし、良い行いがまったく必要ないという意味ではありません。ここでイエス様は「どう聞くべきか」ということに目を向けられます。
- ・ただみ言葉を聞くだけではなく、その恵みをどうしていくのか。神さまから与えられた愛を誰に伝えるのか。強制されるのではなく、喜びにあふれハレルヤと叫びながら押し出されていく。
- ・神の言葉を聞いて、行う人となりましょう。イエス様はその人たちを、「神の家族」と呼ばれます。わたしたちの教会は、神の家族の集まりとなっているのでしょうか。「聞くこと」と「行うこと」、そのバランスはどうでしょうか。

(7月 31日)「ルカによる福音書 8:26~39」

「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。

(ルカによる福音書 8章 39節)

- ・異邦人の住む町で、イエス様は悪霊に取りつかれた人から悪霊を追い出されます。レギオンと呼ばれる悪霊が豚(ユダヤ人は汚れていると考えていた)の中に入り、次々と湖の中に飛び込んでいく様子は、想像するだけで怖いものがあります。
- ・実際にその様子を見ていたゲラサ地方の人たちは恐怖にとらわれ、イエス様に自分たちの住む場所から出て行って欲しいと願います。彼らはイエス様を受け入れることができなかつたのです。
- ・一方、悪霊を追い出してもらった人は、イエス様に従おうとしました。イエス様はその申し出を受けず、自分の家に帰り、そこでこの出来事を言い広めるように告げます。彼にふさわしい場所が、与えられたということです。

(7月 1日)「ルカによる福音書 1:57~66」

父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。

(ルカによる福音書 1章 63節)

- ・高齢の妻エリサベトに子どもが生まれるという主の天使の言葉を信じることができなかつたザカリアは、口が利けなくなっていました。近所の人々や親類が手振りでも話しかけているところを見ると、耳も聞こえなくなっていたことがわかります。
- ・この当時、生まれてきた子どもには祖父の名前などを付けることが一般的でした。ただし父親の名前をそのまま付けるのは稀で、「ティマイの子、バルティマイ」(バルは息子の意味)といったつけ方もあったようです。
- ・しかしヨハネは違いました。彼の名は主の天使によって定められていました。つまり神さまの思いがその名前に込められたのです。ヨハネとは、「神さまは恵み深い」という意味です。彼はイエス様の道備えをする者として、イエス様の半年前に生まれました。

(7月 2日)「ルカによる福音書 1:67~80」

父ザカリアは聖霊に満たされ、こう預言した。

(ルカによる福音書 1 章 67 節)

・「その名はヨハネ」と書き記したザカリアの口は、神さまによって開かれました。ザカリアは疑う者から、信じ賛美する者へと変えられたのです。この箇所を新共同訳聖書は「ザカリアの預言」と書いていますが、「ザカリアの賛歌」と解釈した方がよいでしょう。

・ザカリアが洗礼者ヨハネの誕生予告を受けてから誕生するまで、およそ 10 ヶ月にわたる沈黙の期間がありました。神さまの計画を聞きながら受け入れることができなかつた自分に対する深い後悔もあったことでしょう。

・しかしこの賛歌を聞くと、ザカリアの心には後悔だけではなく喜びも満ち溢れていたように思います。エリサベトをはじめ他の人との会話がないうち、ザカリアは神さまに語り掛けられ、その思いに気づくことができたのではないのでしょうか。

(7月 3日)「ルカによる福音書 2:1~7」

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。

(ルカによる福音書 2 章 1 節)

・ルカによる福音書は、「順序正しく」書くのだと 1 章の初めに書いてありました。そのためイエス様の誕生は、皇帝アウグストゥスが全領土の住民におこなった住民登録の勅令という、歴史的状況に関わる記述と共に記されています。

・この世界史の文脈の中にイエス様の誕生が結び付けられることで、その出来事には普遍的な意味が与えられます。イエス様はユダヤだけに特化した救い主ではなく、全人類のために誕生された方だということを伝えているのです。

・「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」と記述を見ると、幼稚園などの降誕劇(ページェント)を思い出す方もおられるでしょう。なおイエス様は洞窟で生まれたのだという伝説も、紀元 2 世紀半ばまでに広まっていったようです。

(7月 28日)「ルカによる福音書 8:1~8」

悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。

(ルカによる福音書 8 章 2~3 節 a)

・ルカ福音書はここで、12 弟子と共にイエス様に従う女性たちに言及します。聖書が書かれた時代、女性の地位は低く、宗教的行事や公的な活動からは除外されていました。

・しかし聖書の中では、彼女たちの存在は非常に大きなものでした。特にマグダラのマリアは、イエス様の十字架の場面を見守り、イエス様の墓を訪れ、そして復活の証人として描かれていきます。

・彼女はイエス様の弟子として重要な役割を担っていたのだと、多くの研究者は記します。わたしもそのように思います。わたしたちの教会も、性別など関係なくすべての力で支え合えるといいですね。

(7月 29日)「ルカによる福音書 8:9~15」

良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。

(ルカによる福音書 8 章 15 節)

・4 節から始まる「種を蒔く人のたとえ」に違和感を覚えないのでしょうか。わたしたちが思い浮かべる種まきは、穴をあけた場所に種を落とすやり方だと思えます。ヒマワリや朝顔など、そうして植えてきました。

・しかしパレスチナ地方の種まきは、種をばらまいた後で土を耕すという方法でおこなわれます。この種をばらまき耕す人と、神さまとを重ね合わせて考えてみましょう。

・わたしたちがどのような土地にいても、種は与えられるのです。たとえすぐに芽が枯れても、試練につまずいても、いつか忍耐して実を結ぶことを神さまは期待されているのではないのでしょうか。

(7月 26日)「ルカによる福音書 7 : 18~35」

主のもとに送り、こう言わせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

(ルカによる福音書 7 章 19 節)

- ・ルカによる福音書ではイエス様と洗礼者ヨハネとの対比が多く語られます。誕生が天使によって予告される、天使に名前を告げられる、妊娠中に母親同士が出会う、洗礼者ヨハネの誕生の半年後にイエス様が生まれる。
- ・聖書は洗礼者ヨハネを旧約最後の預言者と位置づけます。彼は荒野で悔い改めを叫び、断食をしました。しかし彼がいくら叫んでも、人々は神さまの前に本当の意味で「正しい者」とはなれなかったのです。
- ・イエス様はナザレの会堂で宣言した通り、弱く小さくされた人を立ち上がらせるために来られました。自分の力ではどうすることもできない人たちが、もう一度神さまとの正しい関係に戻ることに、それが神さまの願いであり、イエス様を遣わされた意味なのです。

(7月 27日)「ルカによる福音書 7 : 36~50」

二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。

(ルカによる福音書 7 章 42 節)

- ・ユダヤでの食事は、多くの場合扉が開けられた状況でおこなわれていたようです。また招かれた人は寝転がって足を投げ出し、肩ひじをつけて食事をしていました。だからこの女性はイエス様の足元に行くことは容易にできたのでしょう。
- ・ただしその行動は、してはならないことでした。なぜなら彼女は「罪深い」女性だったからです。それでも彼女は、イエス様に対してただただ愛を示します。イエス様は彼女のおこないを「信仰」と認めました。
- ・彼女は多く赦されたから、多く愛すのだとイエス様は言われます。わたしたちはどうでしょうか。どれだけの借金を帳消しにしてもらっているのでしょうか。「わたしは自分の力で借金を返した」、「わたしにはそもそも借金はない」、そう思っていないでしょうか。

(7月 4日)「ルカによる福音書 2 : 8~21」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

(ルカによる福音書 2 章 15 節)

- ・羊飼いが野宿をしていると突然主の天使があらわれ、周りが主の栄光で照らされる。とても美しく、心に残る場面です。「のはらでひつじがめえめえ」という歌が頭の中をよぎったという方もおられるのではないのでしょうか。
- ・羊飼いに喜びの知らせが真っ先に届けられたということ。ここには大きな意味がありました。というのも定住する場所を持たない羊飼いは貧しく、また神さまの掟である律法も守ることができなかったからです。(動物を相手にしているのに、週一度休め、なんて無理です)
- ・イエス様の誕生の知らせが、金持ちや地位の高い人、宗教家などではなく、貧しく虐げられていた人にまず伝えられたということ。そのことは、神さまの目がわたしたちにも向けられていることを示しているのです。

(7月 5日)「ルカによる福音書 2 : 22~38」

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。

(ルカによる福音書 2 章 22 節)

- ・男の子を産んだ母親は、律法によると 7 日間汚れており、さらに子どもの割礼後も 33 日間は血の清めのために必要とされていました。そしてその期間は、聖なる場所である神殿に入ることができませんでした。(キリスト教ではそのような決まりはありません)
- ・イエス様の両親は、律法をきちんと守っていたようです。しかしその奉獻のときにシメオンが語った預言は、両親を驚かせました。さらに「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」と言われたマリアの心境はどうだったのでしょうか。
- ・シメオンに続いて、女預言者アンナが登場します。ルカ福音書ではしばしば、男性と女性とが対になって書かれます。なお旧約聖書で女預言者として紹介されるのは、ミリアム(出 15 : 20)、デボラ(士 4 : 4)、フルダ(王下 22 : 14)、イザヤの妻(イザ 8 : 3)の四人だけです。

(7月 6日)「ルカによる福音書 2:39~52」

すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」

(ルカによる福音書 2 章 49 節)

・ユダヤ人の男子は 13 歳で「律法の子」とされ、一人前とみなされていました。この時のイエス様は 12 歳なので、成人の一步手前と考えることが出来ます。イスラエルの成人男子は年に三回エルサレムに行き、祭りに参加することが義務付けられていました。

・イエス様の両親も、毎年エルサレムに行っていたようです。ナザレから 100 km 以上離れた場所まで、彼らは地域ぐるみで移動していました。だから近くに我が子がいなくても、「どこかの家族と一緒に歩いているだろう」と思っていたのでしょう。

・しかしイエス様は、神殿に残っていました。そればかりか、教師たちの真ん中で話を聞き、質問もしていたようです。イエス様には神さまから知恵が与えられ、ご自分は神さまの家に属する者だと認識されたのです。

(7月 7日)「ルカによる福音書 3:1~20」

悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起すな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。(ルカによる福音書 3 章 8 節)

・ルカ福音書では、洗礼者ヨハネとイエス様とが対比されて描かれてきました。誕生の予告や誕生物語を通して、道備えをする洗礼者ヨハネの役割が示されていきました。

・ヨハネは人々に、悔い改めを叫びます。そして「ふさわしい実を結ぶ」ように、迫るのです。具体的な悔い改めの方法も示しつつ、おこないによって神さまに立ち返るように語ります。

・ヨハネは「旧約最後の預言者」と呼ばれることがあります。旧約の時代、人々は神さまから与えられた掟を守ることができずにいました。神さまはその様子をご覧になり、イエス様をわたしたちの間にお遣わしになりました。わたしたちは、何をすればよいのでしょうか。

(7月 24日)「ルカによる福音書 7:1~10」

そこで、イエスと一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は友達を使いに行って言わせた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。」

(ルカによる福音書 7 章 6 節)

・ルカによる福音書は、異邦人(ユダヤ人以外の人)が多くいる共同体の中で書かれたと考えられています。今日の箇所に出てくる百人隊長は異邦人でした。

・彼は異邦人でありながらユダヤ人のために会堂を建て、ユダヤ人を愛していました。その思いがユダヤ人の長老たちを動かし、イエス様をも動かしました。しかしイエス様に会った百人隊長は、言葉だけを求めました。

・神さまを畏れ、そして信じる。異邦人である百人隊長のこの信仰に対し、イエス様は感心します。原文では「驚嘆し」という言葉です。この百人隊長の姿こそ、わたしたちの信仰のお手本となるのではないのでしょうか。

(7月 25日)「ルカによる福音書 7:11~17」

主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

(ルカによる福音書 7 章 13 節)

・ナインでやもめの息子を生き返らせたこの物語は、ルカ福音書にしか書かれていません。わたしたちはこの物語を読むときに、「死人が生き返った」という奇跡に目が行きがちですが、実はもっと大きなポイントがあります。

・それは、「誰もイエス様に頼んでいない」ということです。イエス様の元に行き、「どうかこの子を生き返らせてください」とは言っていないのです。それどころか誰かの信仰をほめることもありません。

・この奇跡物語の動機は、イエス様の憐れみです。母親の涙を見て一方的に憐れみ、手を差し伸べる。そのときに告げられる「もう泣かなくともよい」という言葉は、きっとわたしたちの元にも届けられることでしょう。

(7月 22日)「ルカによる福音書 6:37~42」

人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。

(ルカによる福音書 6章 37節)

- ・人間はどうして、他人を裁きたがるのでしょうか。わたしたちは社会生活だけでなく教会においても、「あれはダメだ、これはいけない」と決めがちです。そしてそれに従うことが出来ない人を遠ざけてしまうことがあります。
- ・他人を裁き、その罪を定めることで、自分の正しさが証明されるのでしょうか。ファリサイ派や律法学者はそう考えていたかもしれません。しかし神さまの前に正しい人は、一人もいないのです。
- ・自分の目の中にある丸太に気づかずに相手のおが屑を取ろうとする光景は、とても滑稽です。神さまから見たらわたしたちは、そんな一人ひとりなのです。わたしたちは人を裁いたり、罪に定めたりすることから解放されましょう。

(7月 23日)「ルカによる福音書 6:43~49」

わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。

(ルカによる福音書 6章 46節)

- ・イエス様はぶどうやいちじくなど、当時の人たちにとって身近なものを用いて人々に語ります。「良い実がなるのは良い木だ」ということが当たり前であったので、イエス様の言葉はすんなり入ってきたことでしょう。
- ・「平地の説教」の最後に、「家と土台」というたとえが語られます。マタイ福音書では岩の上に家を建てた人と、砂の上に家を建てた人が対比されていました。ルカ福音書では「土台」に焦点が当てられます。
- ・土台をしっかりと作るとは、どういうことでしょうか。日々祈り、み言葉に聞くことも、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えることだと思えます。わたしたちの信仰がしっかりと建てられるように、歩みましょう。

(7月 8日)「ルカによる福音書 3:21~38」

聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

(ルカによる福音書 3章 22節)

- ・イエス様が洗礼を受けたとき、聖霊が鳩のように降って来たとあります。奈良基督教会の洗礼盤の上には、鳩が乗っています。イエス様が洗礼によって神の子であることを改めて示されたように、わたしたちも洗礼によって神さまの恵みの中に入ります。
- ・イエス様はおおよそ 30歳のときに宣教を開始されました。ダビデは 30歳で王となりました。またヨセフが活動を開始したのも、エゼキエルが召命を受けたのも 30歳でした。祭司やレビ人が務めにつくのも 30歳からだと言われます。成熟した時期なのでしょう。
- ・ルカに書かれた系図とマタイの系図を見比べてみると、共通している名前は 16名しかありません。大きな違いは、ルカの系図はノアやアダムはもちろんのこと、神さままで遡るということです。イエス様は神の子であるということ強く伝えてくれます。

(7月 9日)「ルカによる福音書 4:1~15」

イエスは、『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある』とお答えになった。

(ルカによる福音書 4章 4節)

- ・イエス様は聖霊に満たされ、霊によって荒野に導かれます。悪魔からの誘惑は、神さまがご計画されていたことでした。この 40日間の誘惑の出来事は、出エジプトの後 40年間荒野でさまよったイスラエルの民を思い起こさせます。
- ・悪魔は「お前が神の子なら」と、三度誘惑の言葉を投げかけます。「石をパンにしる」、「わたしを拝め」、「神を試せ」。それらの悪魔の言葉は、わたしたちの口から出される祈りの言葉と通じるところがあるように思うのは、わたしだけでしょうか。
- ・イエス様は聖書の言葉を用いて、悪魔を退けました。わたしたちの心に、聖書のみ言葉は満たされているでしょうか。自分のおこないを振り返るときに、聖書のみ言葉を思い起こしたいものです。ただし人を裁くために、聖書の言葉を用いるのはやめましょうね。

(7月 10日)「ルカによる福音書 4:16~30」

そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

(ルカによる福音書 4章 21節)

- ・イエス様は故郷ナザレの会堂で、イザヤ書 61 章の言葉を朗読しました。そしてこの聖書の言葉が「今日」、実現したと語ります。この「今日」とは 2000 年前のその日のことにとどまらず、わたしたちが耳にしたときも含まれます。
- ・一体なにが実現したのでしょうか。それは、貧しい人に福音が告げ知らされ、捕らわれている人は解放され、目の見えない人は見えるようになり、圧迫されている人は自由になるということです。
- ・わたしたちもイエス様に倣う者として、このイザヤ書の言葉を大切にしたいと思います。わたしたちが参与する働きは、誰のために為すべきことか。教会は誰と共に歩むべきか。一緒に考えていきましょう。

(7月 11日)「ルカによる福音書 4:31~37」

人々は皆驚いて、互いに言った。「この言葉はいったい何だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じると、出て行くとは。」

(ルカによる福音書 4章 36節)

- ・昨日の箇所は、イエス様が来られたことによって神さまの恵みの業が「実現」するという宣言でした。その一つに、「捕らわれている人に解放を」という言葉がありました。
- ・会堂に、汚れた悪霊に取りつかれた男がいました。本来彼のような「汚れた」とされる人は、会堂からも、人々の交わりからも排除されていたことでしょう。しかしイエス様は、「構わないでくれ」というその人に、構ったのです。
- ・人々は、イエス様の「言葉」に驚きます。「おこない」ではなく「言葉」に権威を感じるのです。ヨハネ福音書の冒頭「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」が思い起こされます。

(7月 20日)「ルカによる福音書 6:17~26」

イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった。大勢の弟子とおびただしい民衆が、ユダヤ全土とエルサレムから、また、ティルスやシドンの海岸地方から、イエスの教えを聞くため、また病気をいやしていただくために来ていた。汚れた霊に悩まされていた人々もいやしていただいた。

(ルカによる福音書 6章 17~18節)

- ・イエス様は 12 人を使徒として選んだあと、山を下ります。そこでは多くの人たちがイエス様を待っていました。イエス様は彼らをいやし、6 章の終わりまで続く長い説教を語られます。
- ・マタイ 5~7 章の山上の説教と内容が似ているものの、ルカでは山を下りているので「平地の説教」と呼ばれます。単に場所の違いではなく、ここには大きな意味があります。それはほとんどの人は自力で山を上ることが出来なかったということです。
- ・神さまのみ恵みが自分の元にくるのを、ただただひたすら待つ。それしか出来ない多くの人に、イエス様は関わられたのです。イエス様が語られたことは、「逆転」が起こるということでした。幸いと災いとが、神の国では逆転するのです。

(7月 21日)「ルカによる福音書 6:27~36」

自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。

(ルカによる福音書 6章 32節)

- ・メールや Line などの発達によって、他の人と意見を交わす機会は増えたように思います。また Facebook やニュースの掲示板にも様々な考えを自由に書き込むことができるようになりました。
- ・しかし中には、人を傷つけ、見るに耐えられないような内容の物もあります。「敵を愛する」ということは、自分とは考えも生き方もまったく違うような人も大切にしなければという意味です。
- ・31 節の「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」は黄金律(ゴールデンルール)と呼ばれ、すべての基本のことです。思ったことを何でも書き込むのではなく、少し立ち止まって、「自分が言われたらどう思うか」考える余裕が欲しいものです。

(7月 18日)「ルカによる福音書 6:1~11」

そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」
(ルカによる福音書 6章 9節)

- ・ルールや規則が絶対化され、人々がその枠組みの中に入れられるということは一般社会においてもよくみられます。法律や校則、そして当時の安息日もそうでした。安息日には一切の労働を禁ずるという強い掟でした。
- ・一方、「牧会的配慮」という言葉があります。教会や社会的にはこう決まっているかもしれないけれども、牧師の判断でこのようにおこなう、と決めることです。礼拝堂の使い方や聖歌の使い方、様々な人との関わり方にいたるまで、あらゆる配慮がなされます。
- ・その根底にあるのは、「イエス様だったらどうするか？」という思いです。イエス様だったら子どもを「うるさい」と言って追い出したでしょうか。献金をちゃんと納めないと礼拝堂に入ってはならないと言われたでしょうか。「安息日の主」に聞いていきましょう。

(7月 19日)「ルカによる福音書 6:12~16」

そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。
(ルカによる福音書 6章 12節)

- ・イエス様は 12 人を選ぶ前夜に山に登り、祈られました。このことから選ばれた 12 人は、神さまのみ心によって使徒とされたことがわかります。その中にイエス様を裏切ることになるユダが含まれるということは、裏切りも神さまのご計画なのでしょう。
- ・12 という数字は、イスラエル民族の数を示します。彼ら使徒たちが新しいエルサレムをつくっていくイメージでしょうか。イスカリオテのユダがイエス様を裏切り死んだあと、使徒言行録にはマティアを選び、「12 人」になるように補充した記事が書かれています。
- ・この 12 人の多くは、聖書の他の箇所にはほとんど記述がありません。しかし様々な伝説が残っています。興味のある人は、「遠藤周作で読むイエスと十二人の弟子」(遠藤周作著)を手にとってみてください。

(7月 12日)「ルカによる福音書 4:38~44」

イエスが枕もとに立って熱を叱りつけられると、熱は去り、彼女はすぐに起き上がって一同をもてなした。
(ルカによる福音書 4章 39節)

- ・イエス様はシモンの家に行かれます。シモンとは明日登場する漁師、シモン・ペトロのことです。マルコ福音書ではペトロは弟子になってイエス様を家に招きますが、ルカ福音書では弟子になる前に家に招いたことになっています。
- ・家には、ひどい熱に苦しめられているシモンのしゅうとめがいました。彼女をいやすために、イエス様は熱に対して叱りつけました。手を取るわけでもなく、手を置くわけでもありませんでした。
- ・言葉の力によって、イエス様は彼女をいやします。「この言葉はいったい何だろう」と人々が驚いた前回の箇所場面が、心に思い起こされます。

(7月 13日)「ルカによる福音書 5:1~11」

これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。
(ルカによる福音書 5章 8節)

- ・漁師を弟子にする召命物語はマタイ・マルコにも載せられていますが、ルカ福音書の物語には他にはない特徴がいくつか見られます。まずシモン・ペトロとイエス様はすでに会っていました。4章の終わりでシモンはイエス様を家に招いています。
- ・またマタイ・マルコではイエス様はただ「わたしについて来なさい」と呼ばれたとありますが、ルカではイエス様の指示通りに網を降ろすと、おびたしい魚がかかったという物語が書かれています。
- ・その奇跡に恐れ、「わたしから離れてください」と言うシモン・ペトロの姿に、親近感を覚えます。わたしたちは言葉だけを信じて歩むことは難しいかもしれませんが、でも戸惑い恐れながら、イエス様に何とかついて行こうとする気持ちが必要なのです。

(7月 14日)「ルカによる福音書 5 : 12~16」

イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、
たちまち重い皮膚病は去った。
(ルカによる福音書 5 章 13 節)

- ・「重い皮膚病」とは現在のハンセン病だけではなく、いくつかの皮膚病をします。この病気は罪に対する罰とされ、この病気にかかると共同体から追い出され、また治る見込みはないとされていました。
- ・協会共同訳聖書では、病気の人とイエス様の言葉が新共同訳とは違う翻訳で書かれています。「主よ、お望みならば」という病気の人言葉に対し、イエス様は「私は望む。清くなれ」と答えられます。「御心ならば」、「よろしい」とは随分印象が変わります。
- ・イエス様は、社会から排除された人々が元に戻ることを望まれているのです。単なる病気の癒しなのではなく、人間関係の回復や社会復帰など、様々な要素がここに含まれます。イエス様は人が人として生きていくことをお望みなのです。

(7月 15日)「ルカによる福音書 5 : 17~26」

イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。
(ルカによる福音書 5 章 20 節)

- ・当時、様々な病気は神さまからの罰だと考えられていました。その人（あるいは肉親）が罪を犯したから病気になったのだと、人々は考えていました。中風とは体の一部が麻痺する病気です。きっとたいへんな罪を犯したに違いないと考えられていました。
- ・しかし、その「罪人」とされていた人に、手を差し伸べる人たちがいました。彼らは歩けないその人を床に乗せ、イエス様の元につれて行きます。さらに家に入れないと知ると、屋根に上り瓦をはがして、その人を床ごと群衆の真ん中に降ろします。
- ・イエス様は、その人たちの信仰を見られて、罪の赦しを宣言されます。病気の人ではなく、その仲間の信仰を良しとされたのです。病気の人を見捨てず、イエス様の元に連れて行き、願い求める。これはわたしたちの教会にも求められる姿勢なのではないでしょうか。

(7月 16日)「ルカによる福音書 5 : 27~32」

そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大勢いて、一緒に席に着いていた。

(ルカによる福音書 5 章 29 節)

- ・徴税人はお金持ちでした。彼らはユダヤ人でしたが、ローマ帝国からユダヤ人に課せられた税金を集めていました。しかも決められた額以上の物を集め、差額は自分の懐に入れていました。ユダヤ人にとって、彼らは裏切り者でした。
- ・教会は金持ちが集う場所ではない。社会的弱者にのみ手を差し伸べたいと言われる人がいます。果たしてそうでしょうか。イエス様はどうして彼らの宴会に参加して、飲み食いしたのでしょうか。
- ・お金がある、なしが基準なのではありません。自分の弱さに気づき、イエス様を受け入れる人に、喜びの宴は開かれます。すべての人が招かれ、神さまに向き直ること。それが神さまの思いです。そのためにイエス様は、すべての人と食卓を共にしようとされるのです。

(7月 17日)「ルカによる福音書 5 : 33~39」

そして、イエスはたとえを話された。「だれも、新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい服も破れるし、新しい服から取った継ぎ切れも古いものには合わないだろう。」

(ルカによる福音書 5 章 36 節)

- ・「旅する教会」と日本聖公会のことを称した方がおられます。イエス・キリストは 2000 年前に十字架につけられ、復活されました。そこからキリスト教は始まりましたが、聖書の解釈や教理など、様々な「神学」も生まれてきました。
- ・人間の考えることに「絶対」はありません。神さまから与えられたみ言葉を元に、わたしたちの教会はいつもなにが神さまのみ心なのかを考えながら、「旅する」ことが大事なのです。
- ・古い習慣や伝統にとらわれずに、何が今必要で、何が今求められているのか考えていきましょう。教会が常に新しく、生き生きとしたものとされ、用いられるようにと祈り続けましょう。